

「南部津軽松前濱通絵図」について

滝本 敦¹⁾

A Report on “Nanbu Tsugaru Matsumae Hamadori Ezu”

TAKIMOTO Atsushi

キーワード: 米沢藩、岩瀬家（岩瀬三左衛門政辰）、蝦夷地警固、「白神潮」・「中潮」・「龍飛潮」

1. はじめに

青森県立郷土館では、開館以来青森県と関係のある資料を数多く収集してきており、また、当館の歴史展示室が北方世界との交流をテーマの1つにしていることから、北方関係の資料も積極的に収集している。資料の中には県内各地から寄贈された資料の他、青森県の歴史・文化等と関連して重要であるにもかかわらず、県外流出の可能性がある、もしくは県外で所蔵されているという資料を購入したものも含まれており、購入後は展示や調査研究に活用している。

今回取り上げた「南部津軽松前濱通絵図」も平成17年度に購入した資料である。これまでも展示や書籍掲載による紹介等で活用してきたが、津軽の魅力と文化を世界に向けて発信することを目指した事業である、文献観光資源学「津軽デジタル風土記の構築」プロジェクトにより、今年度中にはデジタル画像の公開も行う予定である。デジタル化とその公開に向け、本絵図の特徴や作成された背景等について改めて調査・検討をした内容を報告する。



写真1 「南部津軽松前濱通絵図」全体

2. 絵図の概要

(1) 作製年代、法量、主な内容等

本絵図は、文化5（1808）年に作製された絵図の副本、または写しである（縦132.0 cm×横123.0 cm、一鋪、紙本着色）。描かれた範囲は、蝦夷地のうち箱館周辺とそこから松前に至る海岸沿い、ならびに福山（松前）城下、

1) 青森県立郷土館 研究主査（〒030-0802 青森市本町二丁目8-14）

津軽海峡を挟んで津軽領の津軽半島の龍飛、三厩、今別から青森、そして津軽領と隣接する南部領の藩境に位置する野辺地に至る地域である。内容については、町名・村名と家屋の概数、河川の特徴、橋の有無、沿岸部の岩礁等の地形と名称、街道などの陸上の情報と、現在の津軽海峡上を結んだ航路とその距離・渡海湊、海峡中央の流れの強い潮流などの海上の情報が詳細に描かれている。

(2) 作者、絵図の作製の背景

作者は米沢藩絵図方である岩瀬家の岩瀬三左衛門政辰とされる²⁾。岩瀬家は、もとは陸奥国岩瀬郡須賀川の武士で、藤左衛門正清の時の天正7(1579)年に伊達家に仕えはじめ、その後伊達氏に従って米沢の地に移り住んだのち、同地の新領主となった上杉氏米沢藩に仕えるようになったとされる。

正清から数代後、小右衛門政秀が承応2(1653)年に召し抱えられた後、藩命により2度にわたって西国・中国・北国(西日本や北陸)の調査を実施、その帰国後に絵図方に任命されている。岩瀬家は政秀以降、代々米沢藩の絵図方を勤めるとともに、藩命による各地の調査・情報収集、幕府との交渉役を担うなど、政治的にも重要な役割を果たしたとされる。

天明3(1783)年に家督を継いだ三左衛門政辰は、寛政8(1796)年に仙台・二本松・三春・相馬に聞き繕い御用(情報収集)のために派遣された。また、18世紀末ころから活発化した蝦夷地周辺への外国船(主としてロシア船)の接近・襲撃事件と、それに伴う東北諸藩の蝦夷地警固動員を受け、再び聞き繕い御用のために文化4年に秋田の酒田に、翌文化5年には、より詳しい情報収集のために箱館に派遣された。そして2ヵ月間の調査を終えて米沢に帰国後、調査結果を絵図にするように命じられ、藩御用絵師の目賀多丹雲と息子の雲林などとともに、米沢から蝦夷地への渡海湊ならびに三厩までの行程記12通、南部・津軽の浜通りより松前・箱館絵図10通、絵入りの行程記と小絵図など、膨大な数の絵図を同年のうちに作製した。

市立米沢図書館には、政秀の代から明治初めに至るまでの岩瀬家の絵図方奉仕に関する資料である「岩瀬家文書」(主に絵図、絵図目録、絵図作製に関する記録・書状など)が収められている。その中の1つであり、米沢藩で作製された絵図とその簡単な成立の由来を記載した文政2(1819)年の「御絵図目録」には、

- 「 一、南部津軽松前浜通絵図 一枚
一、米沢中山より津軽三厩迄絵入り道中記 一冊
一、道中略絵図 一枚
一、蝦夷絵図 一枚

右は、文化五年中、松前・箱館聞き繕い付けられ差戻り候上相仕立て差上げ候控 」

という記載があることから、本絵図が文化5年に三左衛門政辰によって作製されたと判断できる。

なお、本絵図には同名、かつ、同内容・構図の絵図が複数存在することがわかっており、「岩瀬家文書」にも本絵図と同名で大判の絵図①(縦212.7cm×横201.1cm、一鋪、紙本着色、岩瀬家文書698)と、同名かつ大きさもほぼ同等の絵図②(縦131.9cm×横124.7cm、一鋪、紙本着色、岩瀬家文書697)がある。市立米沢図書館の郷土資料担当の職員の方に問い合わせたところ、本絵図と市立米沢図書館の上記①・②の2枚の絵図は構図や特徴などがほぼ同一であり、また、②は①に比べて若干詳細さに欠けるとのことであった。これらのことから、①が正本として作製され、それをもとに②や当館所蔵の本絵図のような小判の絵図が副本・写しとして数枚つくられたと考えられる。この点に関しては、「岩瀬家文書」の中で絵図作製の由来や過程について最も詳しく記載しているといわれる嘉永5(1852)年の「御絵図由来書」において、文化5年の松前・蝦夷関係の絵図作製の際に正本・副本の絵図を各5枚仕立てたと記されており、同様の絵図が複数枚存在することを裏付けているといえる³⁾。

また、米沢藩が蝦夷地警固に関する情報収集を行った背景には、後述するように近隣の庄内藩をはじめ東北諸藩が動員される中、米沢藩もその備えのために積極的な収集を行おうとしたことが推測できる。そして本絵図をはじめ、その他行程記等の作製という重要な役割を絵図方である岩瀬家が担ったことも特徴である。

3. 絵図の詳細⁴⁾

(1) 全体

絵図全体の内容は、前述したとおり、米沢藩(岩瀬三左衛門政辰)が当時の蝦夷地警固に関する情報をまとめたものである。記述・描写内容の概要に関しては、まず南部領についての記載が省略されているという特徴がある。絵図に描かれた南部領の下北半島の部分は薄紫色に彩色され、下北半島の佐井から箱館に至る航路は示されているものの、佐井と同じ南部領の野辺地との間には距離が「二十七里拾壱町」と記された、途中で途切れる街道が引かれているのみで、その他街道沿いの詳細は描かれていない。また、他の絵図でみられるような野辺地か

ら蝦夷地へ向けての航路の記載もない。一方で津軽領、特に夏泊半島周辺から津軽半島北端までの海岸沿いと蝦夷地の松前から箱館に至るまでの地域については詳細な情報が載せられており、本絵図は津軽領から蝦夷地へ渡り、箱館に至る経路とその周辺地域を描写することを目的としたと考えられる。

(2) 蝦夷地警固関係

本絵図が描かれたとされる文化5（1808）年までの、特に18世紀後半から19世紀初頭にかけての蝦夷地警固の概要については以下の通りである⁵⁾。

18世紀後半になると外国船が頻繁に蝦夷地周辺に接近するようになり、さらに襲撃事件も発生するようになった。その中で最終的に幕府は蝦夷地を直轄化する方針をとっていった。具体的には寛政11（1799）年に東蝦夷地を7年間直轄と定め、さらに享和2（1802）年には永久直轄に変更、その後、文化4年には松前および西蝦夷地も直轄化し、最終的に松前・蝦夷地全域を直轄地とした。

一方幕府は、直轄化の流れの中で、東北諸藩に蝦夷地警固のための出兵ならびに駐留を命じている。弘前藩・盛岡藩はアイヌ蜂起への対応もあり、特に早くから警固を命じられていた。外国船への対応に関しても、寛政4（1792）年のロシアのラクスマンのネモロへの来航に際して幕府の使者（宣諭使）の護衛のための出兵を命じられ、その後の寛政8～9（1796～97）年のイギリスのブロートンの2度にわたる来航などを受け、18世紀末には両藩が箱館に拠点を置き、各地に勤番所を設置して継続的に駐留する体制が整えられた。

その後19世紀初頭の文化年間（1804～17）になると、ロシア船による襲撃事件が発生するようになり、幕府はその対応に追われることとなる。文化元年、ラクスマンが事前に受け取っていた信牌をもって同国のレザノフが長崎に来航して通商を求めるも、翌年幕府に拒否されてしまう。その結果、文化3年、レザノフ配下のフヴォストフがサハリン南部のクシュンコタンに上陸して運上屋などを襲撃、翌文化4年にはエトロフ島に上陸して弘前藩と盛岡藩の陣屋などを襲い、その後カラフトも襲撃する事件が発生した。この事件を受け、同年両藩は警固の兵を増兵し、秋田藩と庄内藩が新たに蝦夷地に出兵、翌文化5年にはさらに仙台藩と会津藩が出兵するに至った。

以上のような状況のなか、本絵図には蝦夷地警固に関する情報が数多く描かれている。蝦夷地松前の部分においては、まず、文化4年の松前・蝦夷地全域の幕府直轄地化を受け、同年中に福山城が幕府側に引き渡されるとともに、箱館奉行を松前奉行に改称した上で、奉行所を箱館から福山に移しているが、絵図上では福山城下の松前藩重臣の屋敷地が幕府の役所になったことを示すような表記がみられる（「松前臣下国豊前屋敷御役家成」、「松前臣柿崎時松屋シキ 松前臣松前勇馬ヤシキ 松前臣柿崎将監ヤシキ 右三屋敷トモニ御役家ト成」）。また、文化5年の時点で会津藩は松前地域の警固を割り当てられているが、福山城下の寺町の部分には「會津勢當時右之寺々へ相詰ル」と記され、その他、「南部勤番所」・「津軽勤番所」や海岸沿いの「番所」・「舟番所」も描かれている（写真2）。



写真2 福山城と城下

一方、箱館周辺では、函館湾の入口にあたる「當別」・「茂邊地」付近に「遠見番所」が、湾内の海岸沿いに「御陣屋」が描かれている。また、「名ナイ濱」(現、七重浜)には「先年公儀御開發ニ相成節之御役家 去年中佐竹様御勢被遣節之陣小屋」の表記とともに、秋田藩の警固拠点である土塁と柵に囲まれた陣小屋が描かれている(写真3)。なお、この中の「～去年中佐竹様御勢被遣節～」の部分が、文化4年の秋田藩出兵の翌年、つまり文化5年に本絵図が作製されたと判断する要素の1つともなっている。

その他箱館市中では、「南部勤番所」・「御役屋」とともに、文化5年の時点で仙台藩が箱館地域の警固を割り当てられていたことと関連して、「元津軽勤番所〇〇 松前へ引取故今年之上仙基勢相詰ル」(* 〇〇部分は判読不能)とあり、仙台藩の警固拠点が記されている(写真4)。

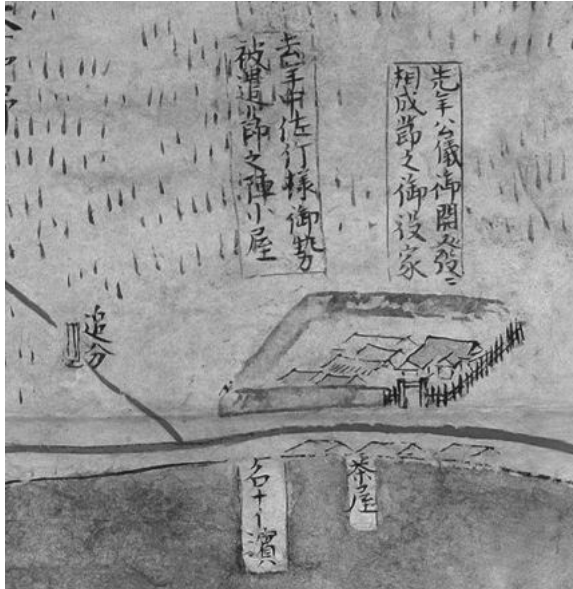


写真3 秋田藩陣小屋



写真4 箱館周辺

津軽領では、「三厩」・「上宇鉄」に「番所」が、「高野崎」・「龍飛崎」に「津軽堅之大筒小屋(津軽御堅大筒小屋)」の表記があり(写真5)、津軽領の海岸防備の様子が描かれている。特に大筒小屋は文化4～5年にかけて「高野崎」・「龍飛崎」をはじめ、大間越・深浦など、領内計10カ所に設置されているため、その状況を正確に表しているといえる。

このように、当時の蝦夷地警固における東北諸藩の拠点を描きつつ、蝦夷地と津軽領の海岸防備の状況をつぶさに記していることが大きな特徴である。



写真5 龍飛崎の大筒小屋

(3) 海峡部分・海岸線

現在津軽海峡と呼ばれている、下北半島・津軽半島と蝦夷地の間にある海峡には西から東へ流れる3本の潮流が描かれ、北から順に「白神潮」・「中潮」・「龍飛潮」という名称が付記されている(写真6)。また、絵図左端には「此三潮東流事太急也」の説明もある。

この潮流の特徴については様々な資料で取り上げられており、例えば少し時代が下るが、蝦夷地探検で著名な松浦武四郎が弘化2～4(1845～47)年の見聞を嘉永3(1850)年にまとめた『蝦夷日誌 巻之一』⁶⁾にも記録されている。海峡渡海に関しての情報を述べたなかで「厩屋の渡りには汐行荒く、其中ノ汐・龍飛・白神の起るに至りては、転舵の業も如何ともなしがたく、内地無比の峻潮なるべし」というように、この潮流の流れが険しいと記している。本絵図でもこの潮流は渦巻く荒波のように描かれており、現在も流れの強さ・うねりの大きさが有名な津軽海峡の潮流が当時も難所として認識され、その様子を分かりやすく、かつ、詳細に描写している⁷⁾。

一方、海岸線については、浅虫の沖合にある「コミ島」・「ハタカ島」、津軽半島の三厩付近の「三厩石」・「冑石」、松前や箱館沖合の「ヘン天（弁天）」（＝弁天社）などの特徴的な島や岩礁を描くとともに、「此辺難所ナリ」・「少之間アリ」など通行の情報の表記もみられる。



写真6 「白神潮」・「中潮」・「龍飛潮」

(4) 町・村

絵図中に描かれた町・村は以下の表1の通りである。

- * 町・村の名称は絵図の表記のままとした。()内は町名・村名と共に記された家数・他所への距離などの情報。
- * 松前・箱館市中の町名については後に別に記述し、表中には記していない。
- * 南部領・津軽領の一部の町・村には「上」・「中」・「下」の文字が朱色で付記されている。その場合は名称の前に【 】で記した。

【表1】

南部領	【上】野邊地（二百軒計 小湊マテ四里廿三丁）
津軽領	刈羽沢、口廣（二十四五軒）、渋川（三十間計）、【上】小湊（野内迄四里十丁）、藤沢（三十軒計）、山口（五十軒計）、中野、土屋、浅虫、サル石、【上】野内（五十軒計 青森マテ二里）、原別（五十軒計）、作り道（三十軒計）、【上】青森（三千軒ト云 大濱マテ一里十丁）、沖田（四十軒計）、新田（二十軒計）、【上】大濱（蓬田マテ三里）、田沢、飛鳥（三十軒計）、瀬戸子（三十軒計）、奥田（八十軒計）、前田（十三軒計）、清水（十軒計）、内真部（三十軒計）、関村（八十軒計）、濱松両村ニテ百軒、小橋、六枚橋（八十軒計）、後方（長キ村ナリ）、四戸橋（五十軒計）、中沢（長キ村ナリ）、長科（三十軒計）、阿弥陀川（三十軒計）、【下】蓬田（四十軒計 蟹田マテ二里）、口廣（六軒計）、瀬部地（十六軒計）、風呂瀬、蟹田（七十軒計）、染留（二十軒計）、ニッ家（十五軒計）、志野（十三軒計）、今津（二十軒計）、【中】野田（六十軒計 平館マテ十八丁）、【中】平館（百軒余 今別マテ五里廿四丁）、石崎（八軒計）、比々川（十軒計）、宇田（十軒計）、奥平部（二十軒計）、砂森（八十軒計）、袋月（四十軒計）、大泊（二十軒計）、山崎（十二軒計）、一本木（十四五軒）、【中】今別（三厩マテ一里）、濱石（二十軒計）、増川（十五軒計）、【上】三厩中ノ濱トモ七十軒計（松前マテ海上八里）、中之濱、六島（五軒計）、藤島（十軒計）、釜沼（七軒計）、下宇鉄（十軒計）、上宇鉄（十二軒計）
蝦夷地	泊川、下及部、上及部、大沢（五十軒計）、新屋（四十軒計）、炭焼沢（二十四五軒計）、禮髭（五十軒計）、吉岡（五十軒計）、宮ノ歌、白府、福島（八十軒計 知内マテ七里六丁）、一ノ渡、知内（五十軒計）、喜子内（札仮マテ一里）、札仮（六十軒計 泉沢マテ一里）、泉沢（七十軒計 當別マテ三里）、釜屋、三石、當別（五十軒計 茂辺地マテ一里）、茂邊地（七十軒計 飛川マテ一里）、飛川（五十軒計 有川マテ一里八丁）、三ツ屋（五十軒計）、有川取合百六十軒計（箱館マテ三里）、セキリツ、箱館（家七百五十軒）

南部領・津軽領の一部の町・村に「上」・「中」・「下」のうちの一文字が朱色で注記されているが、その意味については現段階でははっきりとわかっていない。蝦夷地の町・村に注記されていないことや、家数の違いだけの区分ではないことなどから、今後、他の資料とも突き合わせて考察する必要がある。

その他の情報としては、まず、蝦夷地では「御備蔵」が数カ所描かれるとともに、箱館周辺では、当時町の北側入口に設置されていた枡形や、湾内に文化元年に竣工した人工埋立地の築島とその地に設置された官倉等を表す「御備蔵」も描かれている（写真4）。また、松前では「家中」、「城」、「神明」の表記や「馬口石町」・「唐津内町」・「大松前町（福島マテ五里）」・「小松前町」・「寺町」・「河原町」・「中河原町」・「蔵町」の町名、函館では「元城代屋シキ」、「薬師」、「御役家」の表記と「地蔵町」・「内間町」・「大町」・「弁天町」の町名などの市中の詳細も記されている。その他には、「千人嶽」、「カヤ部嶽」、「此邊大茅野」の自然地形の情報も織り込まれている。

一方、津軽領では、弘前藩と盛岡藩の藩境部分に「境杭（杭カ）」の文字が見え、藩境となった二本又川（絵図では「境川」と表記）を挟んで2本の木柱のようなものが描かれている。また、現在の夏泊半島付近に弘前藩の「津軽越中守番所」と黒石藩の「津軽三十郎番所」などの領境警備の拠点が描かれるとともに、御飯屋が置かれた青森の町並みが特に詳しく描かれ、4カ寺（常光寺・正覚寺・蓮心寺・蓮華寺）のような建物、「城代」の文字などが記されている（写真7・8）。



写真7 黒石藩飛地（現 夏泊半島周辺）と番所
* 左端の「小湊」には朱色で【上】の文字が付記してある

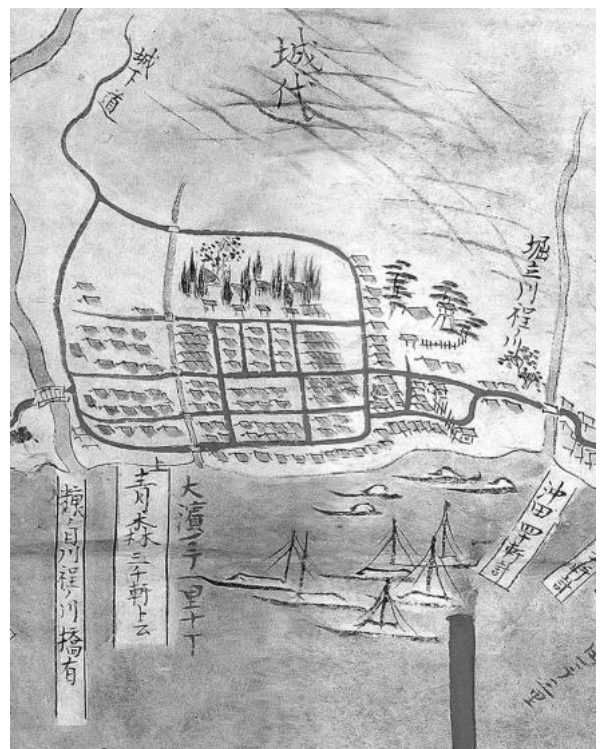


写真8 青森

- * 中央の樹木に囲まれた建物が4カ寺。その右には松のような木に囲まれた御飯屋らしき建物も描かれている。
- * 左端の「糠ノ目川」は現在の堤川、右端の「堀立川」は現在の沖館川を指す

(5) 道・航路

道については、海岸沿いの主要道を朱線で描くことを基本としている。その他、蝦夷地においては「此度江差へ新道切開ノミチナリ」、「クナシリ道」、「追分」などの諸情報も記されており、津軽領では、「青森」から弘前城下につながる大豆坂通、同じく「大濱」（現、油川）から弘前城下につながる羽州街道が描かれ、「城下道」と付記されている。

一方、海上に太い朱線で記された海峡を渡る航路は全部で6本あり、そのうち4本は津軽領の青森・三厩と箱館・松前間をそれぞれつなぐもの、他は松前と箱館間の1本、南部領の佐井と箱館間の1本である。それぞれの航路には「舟路八里」のように距離も付記されている（写真9）。

(6) 河川

一部の河川には名称が記されているが、実際の名称ではなく、米沢の地と関連のある河川名を記しているのが特徴である（写真8）。

具体的には、「堀立川」と記されたのが、津軽領で5カ所、蝦夷地で1カ所ある。その他は以下になる。「糠ノ目川」（津軽領1カ所、蝦夷地1カ所）、「成島（鳴島）川」（蝦夷地2カ所）、「羽黒川」（蝦夷地1カ所）、「犬川」（蝦夷地1カ所）。このうち「堀立川」・「羽黒川」・「犬川」は米沢地域もしくは現山形県を実際に流れる河川の名称であり、特に「堀立川」は上杉氏を支えた直江兼続が米沢城下を松川の洪水からまもるために人工的に造った川で、米沢藩ともゆかりの深い川である。一方、「糠ノ目川」・「成島（鳴島）川」については、管見では同名の河川を確認できていないものの、米沢地域に地名として見えるものである。特に「糠ノ目」は近世の最上川舟運と関連がある地であり、17世紀末に舟運整備の際に上流の終着点として船着場（河岸）が造られた場所であるため、河川名として用いられた可能性が考えられる。

また、実際の表記では「堀立川程ノ川」としており、川の幅や規模を表現していると考えられる。また、「橋有」・「橋長五十間」・「荒川ニテ洪水之節ハ甚心遣アルヘシ」・「歩行越」・「舟渡」などの河川の渡河方法に関わる情報が合わせて記されている。

これらのことから、河川については規模や渡河方法などを把握することを重視したと推測できる。

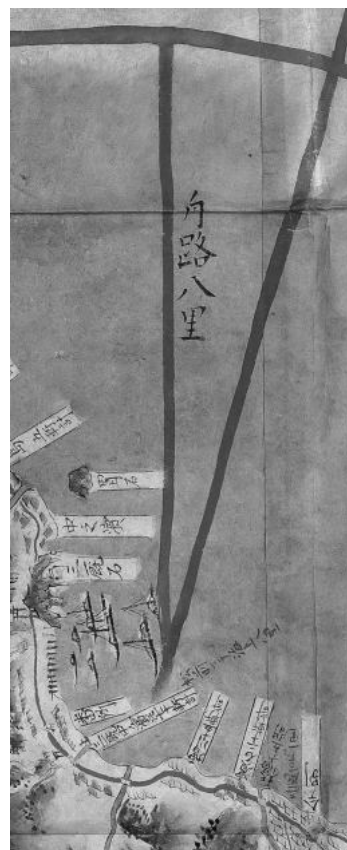


写真9 三厩からの航路

* 三厩からは青森・松前・函館への航路が描かれていて、沖合に舟も見える

4. おわりに

本絵図は、藩の絵図方を勤める人物による実際の踏査に基づいた記述・描写が行われ、その描き方は詳細で写実性に富んだ内容となっている。

例えば、家屋や樹木（樹種による特徴の描き分け）、番所などを囲む木柵の細かな書き入れや、津軽領における水田の描写、福山城の三層の建物や家臣屋敷地の堀とその内部、「名ナイ濱」（現、七重浜）の秋田藩陣小屋の土塁など、文字表記のみでは伝わらない現地の状況が分かりやすく伝わってくる。津軽領・南部領と蝦夷地を描いた絵図は各種あるが、その中でも本絵図は秀逸なものといえる。

岩瀬家文書に含まれているその他の蝦夷地・北方警固に関する絵図と本絵図を比較・検討することで、米沢藩の絵図作製の意図や当時の津軽領・蝦夷地等の状況をより知ることができると考える。今回の調査の中で判読できなかった内容等と合わせて今後の課題としたい。

5. 謝辞

市立米沢図書館所蔵岩瀬家文書の2種の「南部津軽松前濱通絵図」の特徴等について、同館郷土資料担当の職員の方に確認・調査とともにその内容についてご教授いただいた。厚くお礼申し上げる。

《注》

- 2) 岩瀬家ならびに岩瀬三左衛門政辰については、川村博忠（1992 年、「近世絵図と測量術」【第 7 章 藩絵図方と諸藩の絵図巧者（p. 251 ～ 284）】、古今書院）、朝倉有子（1992 年、「御用絵師と絵図編纂」＊ 米沢市立上杉博物館特別展【絵図でみる城下町よねざわ】図録（p. 25 ～ 32）、米沢市立上杉博物館）に詳しい。本文は両書の内容を参考にまとめている。
- 3) 市立米沢図書館ホームページ「市立米沢図書館デジタルライブラリー」（<http://www.library.yonezawa.yamagata.jp/dg/>）、川村博忠（1992 年、「近世絵図と測量術」【第 7 章 藩絵図方と諸藩の絵図巧者（p. 260）】、古今書院）
- 4) この項の文章中の「 」が付いた地名等は、絵図中の表記のまま記述している。
- 5) 18 世紀後半から 19 世紀初頭にかけての蝦夷地警固の内容については、特に函館市（2007 年、「函館市史 年表編」（p. 53 ～ 70）、函館市）、新編弘前市史編集委員会（2002 年、「新編弘前市史 通史編 2（近世 1）」【第 4 章 幕藩体制の動揺と民衆（p. 496 ～ 505、p. 563 ～ 565）】、弘前市）を参考にした。
- 6) 松浦武四郎著、「蝦夷日誌（初航蝦夷日誌）」（函館市、1974 年、「函館市史 史料編第 1 巻」所収（p. 93 ～ 240））
- 7) この 3 つの潮流は、他の近世・幕末期の数多くの絵図にも描かれている。例えば函館市中央図書館所蔵「函館海峡海路図」（作製年不詳）では太い青線で潮流を描き、「白カミ汐」、「中ノ汐」、「タツヒノ汐」と付記している。同じく同館所蔵の「蝦夷松前一円図」（文政 2（1819）年）では「白カミ汐」、「中ノ汐 此汐道五六尺高クナリ流ルコトウツマカカ如流也大船モ多ク此所ニテクツガヘスト也」、「タツヒ潮 タツヒ汐道五六尺高クナリ流ルコトウツマカカ如流也大船モ多ク此所ニテクツカヘスト也」と記し、特に「中ノ汐」、「タツヒ潮」には説明も付記している。また、名称を「上汐」、中汐」、「下汐」と記したものもみうけられる。その他、海峡の潮のうねりを渦巻で表現したものもあり、正保 4（1647）年の「南部領内総絵図」（盛岡市中央公民館蔵）では大渦を描いて「紫丹巻」と記し、慶安 4（1651）年の「正保日本図」では大渦を描いて「紫丹巻大難所常ニウツマキ舟不叶」と記すなど、種々の表現方法が確認されている。

（参考文献）

- ・川村博忠、1992 年、「近世絵図と測量術」【第 1 章 近世の絵図とは（p. 27 ～ 29）、第 7 章 藩絵図方と諸藩の絵図巧者（p. 251 ～ 284）】、古今書院
- ・朝倉有子、1992 年、「御用絵師と絵図編纂」（米沢市立上杉博物館特別展『絵図でみる城下町よねざわ』図録所収（p. 25 ～ 32））、米沢市立上杉博物館
- ・函館市、2007 年、「函館市史 年表編」、函館市
- ・新編弘前市史編集委員会、2002 年、「新編弘前市史 通史編 2（近世 1）」【第 4 章 幕藩体制の動揺と民衆（p. 496 ～ 505、p. 563 ～ 565、p. 598 ～ 601）】、弘前市
- ・青森県史編さん通史部会、2018 年「青森県史 通史編 2 近世」【第 8 章 深刻化する「内憂」と「外患」（p. 472 ～ 476）】、青森県
- ・横山昭男・菅田慶信・伊藤清郎・渡辺信、1988 年「県史 6 山形県の歴史」、山川出版社
- ・横山昭男編、1996 年「図説日本の歴史 6 図説 山形県の歴史」、河出書房新社
- ・1981 年、「角川日本地名大辞典 6 山形県」、角川書店
- ・松浦武四郎著、「蝦夷日誌（初航蝦夷日誌）」（函館市、1974 年、「函館市史 史料編第 1 巻」所収（p. 93 ～ 240））、函館市
- ・吉村博道、1988 年、「市立函館図書館蔵 函館の古地図と絵図」、道映写真
- ・長谷川成一・鳴海秀・三上強二、2006 年、「平成 17 年度郷土館購入資料に関する所見」（「青森県立郷土館調査研究年報」第 30 号所収）、青森県立郷土館
- ・市立米沢図書館ホームページ「市立米沢図書館デジタルライブラリー」（<http://www.library.yonezawa.yamagata.jp/dg/>）
- ・函館市中央図書館ホームページ「函館市中央図書館デジタル資料館」（<http://archives.c.fun.ac.jp/fronts/top>）